

「樊噲」論

橋 本 静

はじめに

上田秋成晩年の創作『春雨物語』最終話「樊噲」(上・下)は、『春雨物語』の中でも最も秋成が筆を費やした作品でもある。

この物語は「みちのくに古寺の大和尚」が往生を遂げようとする際に、「遺偈」の代わりに「まことの事かたりて、命終らん」と自分の生涯を語ったものとして締め括られる。即ち、この作品は主人公の成長につれて物語が進行している形を取っているといえる。そこに於いて、物語の大半を占めるのは人間社会の倫理に囚われる事無くその心の赴くがままに振舞うが故に、尊属殺人、強盗とありとあらゆる社会悪を行う大蔵¹という自然児が大悪徒となり、ある時那須野で出会った一人の「直き」心を持つ法師との偶然の出会いによって「大和尚」への道を歩み始めるまでの過程である。

本稿に於いては、主人公大蔵の精神遍歴の過程を辿りつつ、「樊噲」という作品の構造について考察するものとしたい。

「焚噲」の物語は、伯耆国、大智大権現という恐ろしい神が住む大山の麓にある遊び宿から始まる。物語冒頭に於ける焚噲は、「老いて心有る」仲間や、隠岐国焼火神社のかんなぎが言うように、己の強靱な膂力を自慢する幼児的な世間知らずの愚か者として描かれている。それ故に、「山の僧の驚かすにこそあれ」と神をも恐れぬ態度で伯耆大権現の禁忌を犯し、山に登った証拠として持ち帰ろうとした賽銭箱ごと隠岐国まで飛ばされる神罰を蒙ることになるのである。

ところで、この物語の冒頭に据えられた主人公の神罰による他国追放という奇抜な話の必要性は何処にあったのだろうか。大山登山に示された腕自慢と神をも恐れぬ愚直な焚噲の心は、隠岐への流謫飛行を通じて神の存在を認識し、その人間を超越した神力への畏怖を抱くようになる。と同時に、出雲に帰る際に「八百石と云船にて、ちいさくもあらぬを、風追いていと早し。されどよんべの神の翅にかけしよりは遅しと云」ように、神の飛行速度と八百石船の船足の速さを比べる焚噲の態度からは、人知を超越した神の力を体験したことにより、人への侮りが以前より一層強くなっている事が示される。

そして、神への謝罪という認識を持つて行った大山参詣を経て、神に対して挑戦的な態度を取らない限り、無闇に神罰は下らないという認識がその後の焚噲の大胆で奔放な行動へと繋がっていったであろう事は容易に想像できよう。「出雲へわたり、隠岐の島よりかへるは、罪あるものの大赦にあひし也」といわれて、「大しやく」とあざ名されたという挿話もそれを強調する。

伯耆の国に帰つてきた樊噲は心を入れ替えて働き、多くの錢を稼いだ為には錢が三十貫も貯まった。一旦こうと決めて働くと樊噲は臂力があるだけに、人の何倍もの稼ぎをする。ここに見える樊噲の性質も、彼の「直き」性質として注目しておくべきである。

また、神仏の存在及び人知を超えた靈威を否認なしに信ぜざるを得ない体験をした樊噲は、帰郷後間もなく「一人上りて御わび申して来らん」と、単身再び大山に幣を手向けに登る。それまで、全く神というものを信じていなかったにも拘らず、一度その恐ろしさを体験すると、「権現のたまひし命也。心きよくして、今一たび詣でん」と言い、一人で伯耆大権現までお詫びをしに行くという行動は、樊噲という人間の、剛胆さと共に、ともすれば單純とも取れる子供のような素直さを表している。實際、樊噲が「心あたらまりて、兄がしりに立て、木こり柴荷ひかへりて、親の心とるほどに、大力なれば兄とは刈まさり、錢多にかふる」ことになった大きな要因は、目代の戒めを受け入れたわけでも、親の為でもない。神に戒められたことを実感し、己の命を「権現のたまひし命也。心きよくして、今一たび詣でん」と決めた彼自身の決意の延長線上にあるものであつたと考えられる。

こうしてみると、秋成が「樊噲」という作品の冒頭に据えた大智大権現の神罰という一見無意味に思える挿話は、単に怪奇性を強調して読者の好奇心をそそる為には用意されたものではないといえる。

即ち、並外れた臂力を盾に前後の見境もなく粗暴性を發揮し思いあがつていた樊噲が、一度神の存在を認識し、畏敬の心を持つようになると、それまでの自分の持論を捨て、その存在をあつさり認め「直き」性質を暗に示すものとなつており、物語の最終場面における回心へと繋がるものとして用意されたと考えられる。それ故に、真に樊噲の心を救うものは神の懲らしめという外圧ではなく、内より湧出する懺悔であつた事を結論付け、「心納れば誰も佛心也。放てば妖魔^③」という末文をより効果的にする第一の布石として存在しているのである。

神罰以来、一旦は心を入れ替え、親の氣に入るように振舞つた樊噲だが、春になると再び博打を始めてしまう。この辺りに己の心のままに行動する誘惑に弱い樊噲の心理が描かれている。その後、借金を催促された樊噲は、母親に金を乞うが、思うように金を出しては貰えず、母親を錢櫃の中に閉じ込め、兄嫁を突き飛ばし、そこにあつた有り金二十貫文を担いで逃げ出し、これを阻止しようと追いかけてきた父と兄を振り払おうと大暴れた結果、ふとしたはずみで尊属殺人にまで至つてしまう。ここから樊噲の逃亡と転落の人生が始まる。この樊噲の自律しきれない「いたづら心」から起こつた小さなきつかけは、総じて偶然とはずみが重なり合つたもので、本来意図していた結果ではないことに注意しなければならない。

物語の冒頭では、ただの「腕だてして口とき男」として描かれていた樊噲が「鬼」という形で描写されるようになるのも、この尊属殺人以降であるということにも注意しておきたい。

その後、樊噲は何度も追つ手に捕縛されそうになるが、「物もよくいふぞ」という手配書に違わず、巧く言いつくろい、隙を見てその脅力に物を言わせてその場を逃げ出す。何度も追つ手から逃れた樊噲だったが、あても無い逃亡生活を続けるうちに疫病に罹り、山あいの物陰に倒れ込んでしまう。その後、樊噲は村雲という盗人に助けられ、その手下となり次のような強盗殺人を働くことになる。

馬のあし音ここに来たれば、物をもいはで、松の木ふりたてて、口とる男も馬も打ちふたしぬ。老いたる足

輕の「是は」とて、刀ぬくわざもしらぬにや、あわて逃げんとす。又追ひつきて、「首ほそき奴かな」とて、谷の深きと思ふ所へ投げ落としたり。「馬はついにふみころさぬ」とて、力足してつよくふめば、嘶き叫びて死たるべし。¹⁾

この条に注目したのは、樊噲の凶悪さが、より一層強調されているということである。最初の殺人が、小さな偶然の積み重ねによって行われたものであるのに対して、この条における樊噲の殺人行為は、明らかに自ら進んで行われている。人を谷底に投げ落とすという殺し方は、最初の殺人と重なる表現であるが、ここには最初の殺人において父兄を殺した折に見せた怯えや戸惑いなどは一切ない。²⁾

怯え逃げ惑う年取った足輕を捕まえて谷底深くに投げ落とす様や、面白半分³⁾に馬の腹を踏みつけて殺した拳句、その死体に残り物を打着せて面白がる悪ふざけは、樊噲が既に現世の倫理を逸脱した（妖魔）と化していることを示すものとなっている。

また、村雲が「我が下につきてかせげ」と手下になるように勧める場面で、「ぬす人殿、よくも出であひたる。博突打ちほこりて、かく田舎へはさまよひ来たる也。ばくち打つもぬすみも罪は同じ。」と言って喜ぶ樊噲の言葉は、愚かなまでに単純な人間が進んで犯罪者へと堕ちてゆく過程と心理を示すものとして機能している。

樊噲が奪った金は千両。樊噲は村雲から百両を与えられ、二人で熟田津に遊ぶ。その折、お尋ね者である樊噲は、世間の目を眩ます為に、道後の山寺で剃髪する。その後、播磨に行き二十日ほど村雲の伯母の家に逗留するが、ある日「東の方つひに見ねば、修行しあるかん」と言つて、包み一つを背に負つて村雲に別れを告げる。

ところで、樊噲は千両の金を奪った祝いの酒盛りの席で村雲に対して「樊噲と申す也。これより兄弟とおほせよ。」

と言ひ、また「よき世にあひしよ」とも言つて村雲との出会いを大變に喜んでゐる。それにも拘らず、一月もせぬうちに村雲と別れ、一人で「修行してあるかん」といふ樊噲の言動は誠に不可思議である。一見すれば樊噲の気まぐれとも思える言動だが、彼の無意識での成長、即ち、村雲からの独立を意味していると考えられる。また、門出の際に、村雲が「鬼の鉦たたいて念仏申すがあり。お僧のうつし絵なるぞ」と大津絵にある「鬼の寒念仏」を引き合いに出し、擲揄する場面があるが、これまで「鬼」そのものだった樊噲が表面だけでも僧形に変化することで、いずれ起こるであろう樊噲の変化を示す布石となつてゐるのである。

一人旅立つた樊噲は「大道に出でなば見やとがむる。山につきてぞゆかん」と、人通りを避け山道を行きある山家に一夜の宿を求める。この段に至つて樊噲は再び変化を見せてゐる。剃髮を決心した折の「いづち旅ゆくとも、かの事触流しにあひては、身つきぬべし。僧にやつしてん」といふ樊噲自身の言葉からもわかるように、樊噲の剃髮という行動は決して道心から起こつたものではない。しかし、この剃髮以降の彼の行動を見ればわかるように、樊噲の放埒さと「鬼」の如き容貌は相変わらず残るものの、千両を奪つた折の嗜虐性はすっかり形を潜めてゐる。人氣の無い山中の一軒家、そこに住むのは老女とその息子だけで黄金が一両ある。勞せずして金と食料を奪うにはもつてこの環境であるにも拘らず、樊噲は大人しくしてゐる。それどころか、小賢しくも相場を偽つて黄金を本来の三分の一以下の価値で交換させようとする悪徳商人に怒りを覚えた樊噲は、騙されようとしてゐる山家の老女親子を助け、更に一枚の小判を与えるという正義感すら見せる。重ねて、翌朝にはこの家の母子に乞われるままに「南無大師」を声高く唱え、死者の命日供養までしてゐる。

この声を聞いて「この家には鬼が入りたるか、おそろしき声きこゆる」といつて立ち寄つた柴刈人が「僧はかかるぞたふとき。」と言つてゐる事も非常に興味深い。村雲と別れた時には大津絵の「鬼の寒念仏」そのものだと擲揄れ

た樊噲が、この場面に至つて声こそ「鬼」のようであるとされるとされるものの、「南無大師」を唱える姿は「たふとき」と賞賛されている。このような樊噲の変貌ぶりは誰の眼から見ても明らかなのであり、彼の精神がまた一つ変化したという事が見て取れる。

その後、逃亡の旅を続け北陸を目指した樊噲は、途中月夜・小猿という手下を得て、暫しの間加賀国山中温泉で冬を過ごす。そこで一人の僧が吹き鳴らす笙の音に感じ入り、この僧から喜春楽という曲を習い覚え只管にこの一曲を吹き鳴らして楽しむ。

中村博保氏は、樊噲が笙に感じる様について、「古今著聞集」巻十二にある「盗人博雅三位の筆篋を聴きて改心の事」、「筆篋師用光臨調子を吹き海賊感涙の事」の二話を挙げられ、「両話は強盗が筆篋の音楽に感じて、心改める話で、本編に心象が投影」されると述べておられるが、実際この温泉地において樊噲は、盗人である月夜と小猿を子供のように使い、主を心配させることもなく、大変に頼もしい法師として宿の主人に信頼されている。即ち、ここに於ける樊噲像はこれまでの放埒な悪徒とは違うものとなっている。

その後、大沼の浮島に下ろうと行く道で村雲に再会した樊噲は、城下町に出て北陸一の金持ちという屋敷で盗人としての腕試しをする。最初の強盗の時と同じく、樊噲は見事な手並みで家の金蔵から一挙に二千両もの大金を盗み出すが、村雲に千両、手下二人に五百両を渡し、自らは「数多くは和煩わし」といつて残りの五百両を取った。このよくな樊噲の物惜しみしない態度に村雲も感服し、ここに村雲と樊噲の上下関係は一挙に逆転する。村雲が樊噲に百両しか渡さなかつた事を鑑みれば、その度量の違いも判るであろう。ここに描かれる樊噲像は、頭目としての風格と、豪放磊落な英雄としての威厳が見える。しかし、この威厳も次の段ではあっさり打ち砕かれる。

夜が明けると、樊噲は月夜・小猿に江戸に上るように指示し、村雲と二人で津軽を旨さず。途中日が暮れたが、泊

まるような里も無い。丘の上にある貧しそうな寺に目を止めた二人は、無理やりここに一夜の宿を求め、先客として泊まっていた五十路に近い武士(寺の主の伯父)と世間話をする。話すうちに「人をも殺し、盗みあまたして、むくの命百年と云ふ事あるべからず。」とその無法を指摘する武士の発言に憤った樊噲が、武士に打ちかかるが、一瞬にして当身を腋骨に当てられその場に倒れ、これに続いた村雲も逆手を取られて突き倒される。これまでの樊噲は人間に力で負けたことは一度も無い自然人であつたが、その膂力も武士の「術」には及ばないという事を思い知らされるのである。

翌朝、樊噲と村雲は出立する武士を見送る主の僧が「あの盗人等は、籠の鳥に似たり。病みつかれしかど、手いたくせば、又骨たがへさせんものぞ。心安くおほし出でたまへ」と囁くのを聞き不安に駆られる。二人は主の僧の機嫌を取り結ぼうと宿代として小判一両を差し出すが、主の僧は「盗みし金を法師の納めんやは」と金には目もくれない。恐ろしくなつて二人とも物も言わずに寺を出た。これまで、その膂力と、それによつて得た金で世を渡つてきた樊噲にとつて、武術の心得があり、小判にも全く興味を示さないこの若い主の僧の存在はまさに衝撃と恐怖そのものであつた。

先の事件に気後れして越後に下ると言い出した村雲と別れ、樊噲は心寂しげな様子で一人江戸へと向かう。ある日、雨の振る中浅草寺あたりにやつてきた樊噲は「盗人よ」と口々に叫ぶ声を聞き、もしや月夜と小猿が難儀に遭つてゐるのではと思ひ行つてみる。予感的中し、樊噲は五、六人の侍相手に切り結ぶ手下の二人、月夜と小猿を発見する。「不便也、助けえさせん」と、樊噲は他人のふりをして「今はたがひに無やくのたたかひ也。あつかはん」と、手下二人と侍たちの喧嘩の仲裁に入ろうとする。しかし、侍たちは聞き入れる様子もないので、咄嗟に錫杖で打ち払い、月夜・小猿の二人を小脇に抱えて、飛ぶように駆けてその場から逃げ去る。

老いた武士との争いで完敗するという挿話によつて、樊噲の精神的成長は止まつてしまつたかのように見える。しかし、江戸で月夜と小猿を助けるにあたり、樊噲は、彼らとは無関係の振りをして仲裁に入り無益な争いごとを避けようとしている。「無やくのたたかい也。」という樊噲の言葉は、冒頭に於いて「老いて心ある者」が無闇に人と争う樊噲を諫めた「無やくの争い也」という言葉を再現したかのものである。そこには、樊噲がこれまで見せなかつた慎重さが見られ、最初にあつた野生人の放埒さは消え失せている。

江戸を逃れた三人は那須野に至る。月夜と小猿が道の様子を見に行つてゐる間、樊噲は殺生石の前で焚き火をしてゐた。すると、一人の法師が通りかかるが、法師は樊噲に目もくれずにそのまま通り過ぎようとする。憎らしくなつて樊噲は「法師よ。物あらばくはせよ。旅費あらば置いてゆけ。空しくは通さじ」と脅した。法師は立ち止まつて、「ここに金一分あり。とらせん。くふ物はもたず」と金を樊噲に渡すと、振りかえりもせず静かに通り過ぎる。しかし、一時間も経たないうちに戻つてきて「我発心のはじめより、いつはり云はざるに、ふと物をしくて、今一分のこしたる。心清からず。是をもあたふぞ」と言い樊噲に与える。それを手にした樊噲は急に「心ざむく」なつて、「かく直き法師あり。我親兄を殺し、多くの人を損ひ、盗して世にある事あさましあさまし」と思う一念が募り、この法師に「御徳に心あらたまり、今は御弟子となり、行ひの道に入らん」と願う。法師はこれに「いとよし。こよ」と言つて、二人連れ立って行つた。

このように一度「直き」このころの法師と出会うや、極悪から至善の者へと一瞬にして変化する樊噲の姿は潔さに溢れている。秋成が『胆大小心録』の一六一に「一文不知の僧と剛毅木訥の民とは、必ず無の見成就の人あり。前うしろたがひ、いふに及ばぬことぞ」と記しているように、「一文不知の僧」であり「剛毅木訥の民」である樊噲は、まさしくこの「無の見成就の人」となるべくして描かれている。樊噲の極悪から至善への速やかなる転入の様は論理

を超越したものであり、知識や学問といったものの及ばない不思議の中に存在している。尊属殺人という重罪によって、諸国を流れ歩いた大蔵（樊噲）という男が、様々な人生経験をし、その中で多くの事を学び成長していく様は、那須野での回心という物語の最後にして最高の見せ場にたどり着くまでの布石として置かれていると言うことが出来るよう。

三

回心の地、那須野に於いて「直き」法師に出会うまでに樊噲は三人の法師に出会っている。しかし、樊噲は彼らと関りながらも回心するわけでもない。

一人目は道後で樊噲が追っ手の目を欺く為に剃髪した際に樊噲から小判一枚を受け取って「受戒さづけん」と云った山法師。二人目は山中で「匏笙もて来て、吹て遊」んでいた時に樊噲に乞われて笙（喜春樂）を教えた法師。三人目は江戸に向かう途中で宿を貸りた寺の年若い主の僧である。

最初の二人の僧は、一般的な観念から見れば仏道、また芸術という道を樊噲に教えた師ともいえるだろう。しかし、これら二人の法師は黄金をpush戴いたり、温泉地で羽根を伸ばしたりと、戒律を犯しているわけではないが修行する僧としては潔癖とは言い難い。善くも悪くもない普通の僧侶ではあるが、有体に言えば俗に染まった僧侶である。この最初の二人に樊噲が感化されなかつたのは十分に納得できる。

三人目の僧侶は津軽に向かう途中にある寺の主で病がちな若い僧であつたが、一宿の代金として差し出した小判一両に見向きもせず、「盗みし金を法師の納めんや」と言う潔癖さを持っている。この若い僧は、病で弱つてはいるが、

元は武士の子で、その「武術」の前には樊噲にとつて頼みの綱とも言える贅力も役に立たない。また、法師になつたり、笙を習つたりした折には、頼りになつた金すらも頼りにならないのである。若い主の僧の存在は、樊噲にとつては衝撃と恐怖そのものであつたと言つてよいだろう。しかし、その衝撃と恐怖も樊噲を回心せしめるものにはなつていない。では何故、樊噲は最終場面に急に回心したのであるうか。

那須野で出会つた法師は、言わなければ誰にも分らないであろう事（しかも、強盗相手に）「ふと物おしくて、今一分のこしたる、心清からず。」と云つて戻ってくる。同じように法師の姿をしながら、一方は大罪を重ねてきた者、一方はどこまでも清き心を貫こうとする者。二人の男が合わせ鏡のように対峙する場面は、より一層二人の間にある罪の比重を象的に照らし出している。

そして、何よりこの那須野に至るまでの過程において、秋成は村雲と月夜・小猿という布石を置いているということに注目しておきたい。彼等は、単に旅先で出会つた盗賊仲間（頭目・配下）としてのみ登場しているわけではない。樊噲が那須野へ辿り着くまでに様々な場面において樊噲と彼等の行動は重なり合つた構造を示し、樊噲はトレースしたかのように彼らとの関係を別の場面で繰返す。例えば、盗賊の首領である村雲が初めて樊噲を配下にした時の場面は、後に村雲から離れ、一人立ちした樊噲が月夜・小猿を配下にした時と重なり合う。

村雲↓樊噲

「二人の男どもは、こゝに一日ふた日あれ。見とがめられぬために、むかひの国にて春を待て。金あたへん。ぬすみすな。商人にやつして。我しかま津へいたるをまで」とて、物分ちて、船はこぎ出さす。

樊噲↓月夜・小猿

「おのれらは麓に宿とりて、さて」とて、村雲と二人のほりゆく。

村雲↓樊噲

「おのれはおもしろき男也。落はふれて何をかする。盗みして世をわたれ。我が下につきてかせげ」と云。

樊噲↓月夜・小猿

「おのれ等、ぬすみするとして、力量なくては、いかに命長からん。我につきてかせげ。此金はかりは、常に得
させん」とは云。

また、樊噲に回心の契機を与えた直き法師の前における樊噲は月夜・小猿の立場になっている。同時に、この時の法師の姿は、過去において月夜・小猿と対峙した時の樊噲自身の姿へと重なる。

月夜・小猿↓樊噲

「法師めはいづこへ行ぞ。懐に物あらん。酒代においてゆけ」と云。うしろにも人ありて、笈をしかととらへ、
「此坊主めは金多く持たるぞ」とて赦さぬ面つき也。笈をときおろして、「金あまたあり。とらばとれ」とて、
岩の左に越しかけ、火切出して煙くゆらす。

樊噲↓直き法師

目もおこさで過るさまにくし。「法師よ、物あらばくはせよ、旅費あらば置いてゆけ、空しくば通さじ」と云。

法師たちとまゝまりて、「こゝに金一分あり。とらせん。くふ物はもたず」とて、はだか金を樊噲が手にわたして、かへりもせずゆ。

このような過去と現在が交錯する自己投影の中で樊噲は成長を繰り返している。こういった幾つもの段階を経て、最終的な投影の対象として出会ったのが心「直き」僧であった。この僧に自己投影する事によって、樊噲は生まれて初めて「心さむく」なったのである。眼前に投影された過去の自身、即ち法師が罪と考える事柄が軽ければ軽い程、樊噲の過去に犯した罪は重く彼自身の心に押し掛かるのである。

法師の罪は自分に正直ではなかったというだけで、社会的にも法的にも何ら罪とは思われぬ問題であるが、樊噲がこれまでに犯してきた罪は、尊属殺人、殺人、強盗、窃盗等様々な社会的にも法的にも大罪と云う以外はない罪である。ここに至るまで、樊噲（大威）が「恐ろしく」感じたのは大山の神に神罰を与えられた時と、追っ手に捕らえられはしまいかと心配する時、主の若い僧の眼の只者ならぬ光に恐ろしくなった時であり、いづれも我が身に害が及ぶのではないかという自己保身における恐怖であった。それは、ある種の動物的な、言い換えるなら、本能的な自己防衛から来る恐怖であり、人間社会の中で定められた倫理観に逆らったことに起因したものでなかったのである。そこにもまた彼の「直き」性が現れている。

現在の姿（僧形）と過去の己の状況とが重ねあわされる法師に自身が投影された時、樊噲は生まれて初めて外圧によるものでない、内より湧出する懺悔と自身の行いに恐れを感じるに至ったのである。こうして、出家した樊噲の物語は次のような文で締めくくられる。

この物がたりは、みちのくに古寺の大和尚、八十よのよはひして、けふ終わらんとて、湯あみし、衣あらため、椅子に坐し、目を閉て、佛名をさへ唱へず。侍者・客僧等す、みて申。「いとたふとし。遺偈一章しめし給へ」と申す。「遺偈と云は、皆いつはり也。まことの事かたりて、命終わらん。我ははうき^の国にうまれて、しかくの悪徒なりし。ふと思ひ入て、今日にいたる。釈迦・達磨も、我もひとつ心にて、曇りはなきぞ」とて、死たりとぞ。「心納れば誰も佛心也。放てば妖魔」とは、この樊噲のことなりけり。

秋成はこれまでの樊噲からは想像できないような結末を用意した。樊噲が陸奥の古寺の大和尚となるまでの過程はこの物語の中で語られる事はないが、長大な物語の中で綴られてきた樊噲という男の生き様や、彼の剛毅木訥の人となりを知る読者には、樊噲があらゆる苦境に耐え、一心に精進する姿を容易に思い描く事が出来るだろう。

鷲山樹心氏が「達磨・善導の有を弃て無に帰在せよと云ひしは此始めにわたせりしに大にたがへり」と「胆大小心録」で秋成が述べたことを根拠として、「秋成は、仏教は本来無量無辺の福果を得るなどの功利的願望の達成を目的としたものではなく、かの達磨や善導によつて説かれるように、究極においては「有」より「無」への境界への帰入を目ざすものであるという認識に達していた事実を知る事ができる」と述べられるように、樊噲のそれまでの人生から一転した結末からもその思想は窺える。「いとたふとし。遺偈一章しめし給へ」という弟子や客僧たちの言葉に対し、樊噲自身に己の悪逆非道の過去を語らせ「釈迦・達磨も、我もひとつ心にて、曇りはなきぞ」と生を終わらせる結末は、「心納れば誰も佛心也。放てば妖魔」となる人の複雑な二面性を見事なまでに描き出すと共に、樊噲の成長と開悟を読者にはつきりと示すものとなっているのである。

注

- (1) 冒頭に示される主人公樊噲の本名。以下、主人公を樊噲と呼ぶ。
- (2) 蓑笠を取りに再度山へ登る際、母から「猶つよき事して、又御罰かうむるな」と諭される。一見すれば挑戦的にも見える行為であるが、「とりかへりし」という言葉に注目すれば、神への畏敬の念が樊噲の心に生じからこそその行為であるといえよう。
- (3) 妖魔と仏の前後が入れ替わってはいるが、「春雨物語」より三十年前に刊行された「雨月物語」「青頭巾」に同趣旨の「心放せば妖魔となり。収むる則は仏果を得る」という文が見られる。
- (4) 以下、本文の引用は中村幸彦・高田衛・中村博保 校注訳『新編日本古典文学全集 英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語』小学館による。
- (5) 最初の殺人では、「今はあぶれにあぶれて、親も兄も谷の流れにけおとして」という表現にみられるように、殺人を犯した衝撃に慄き、前後不覚に陥っている様子が窺える。
- (6) 先掲『新編日本古典文学全集 英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語』五四三頁
- (7) 中村幸彦 校注『胆大小心録』(「上田秋成集」岩波書店所収) 三六一頁
- (8) 鷲山樹心『秋成文学の思想』法蔵館八六頁